

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 20 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520460

研究課題名（和文） 日本語可能表現・難易表現とその周辺に関する史的研究

研究課題名（英文） Diachronic Development and Semantic Extension of Japanese Expressions of Ability and Degree of Difficulty

研究代表者

近藤 明 (KONDOH AKIRA)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：50178406

研究成果の概要（和文）：難易表現については、補助形容詞系の表現について、従来の研究成果もを踏まえて一通りの通時的考察を行い、これらの意味変化の方向性や類型、困難表現と容易表現の非対照性等に関して、見解をまとめた。可能表現については「～アヘズ」「～ヤラズ」等の補助動詞系の表現を中心に、近年の研究成果も踏まえつつ考察を深めた。また危惧表現を可能表現・可能性表現の周边的表現の一つとして位置づけ、その史的考察に関する見通しを得ようとした。

研究成果の概要（英文）：With respect to expressions denoting degree of difficulty, I examined expressions with auxiliary adjectives based on my previous research from the viewpoint of diachronic change. Through the examination, I described the direction and types of their semantic change and pointed out asymmetrical relations between expressions of difficulty and those of easiness. With respect to denoting ability, I made detailed observations on expressions with auxiliary verbs such as “ahe-zu” or “yara-zu” based on previous studies. I also maintained that expressions of anxiety are derived from those of ability and overviewed the diachronic development of them.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	300,000	90,000	390,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語史、可能表現、難易表現、危惧表現、文法化、配慮表現

1. 研究開始当初の背景

(1) 難易表現の史的研究については、補助形容詞系の表現を中心に先行研究があり、本研究代表者(以下「代表者」)の論も容易表現・困

難表現の双方にわたって発表されていたが、「～ヨシ/ヨイ」については、申鉉竣による近世以降の研究があるものの、申請者自身の論としてまとめられたものはない等、容易表現の研究が比較的手薄な状況であった。

(2) 補助形容詞系難易表現を通時的に見渡して、意味変化の方向性や類型、容易表現と困難表現の差等を明らかにするといった研究は、先行研究・代表者の研究とも不十分で、可能表現に比して難易表現の研究は遅れ気味の観がある状況であった。

(3) 可能表現の史的研究に関しては、多くの先行研究があり、代表者も「～アヘズ」「～ヤラズ」「～カヌ」等、補助動詞系の表現を中心に論を発表していたが、個別的な論が中心で、それらの相互の関連性等について代表者自身の立場から考察を深めることが十分にできていなかった。

(4) 可能の意を表していた「～カネナイ」が近世の間に危惧の意に転じたことについて、山田忠雄や代表者に論がある。代表者はこれを踏まえて可能(あるいは可能性)と危惧の史的連続性や、そのような意味変化の背景について考察するの必要を感じてはいたが、具体的な成果を発表するに至っていないかった。

2. 研究の目的

(1) 補助形容詞系の難易表現に関して一通りの通時的考察を行う。

(2) 上記(1)の成果をふまえ、補助形容詞系難易表現の意味変化の方向性や類型、容易表現と困難表現の差の有無等を明らかにし、補助形容詞系難易表現の史的変遷についての見通しを得る。

(3) 補助動詞系の可能表現について、代表者の従来の研究では個別的な論にとどまっていたものについて、類義表現として対比的に検討することで、それぞれの表現についての考察を深める。

(4) 前述の1の(4)のような経緯から、可能と危惧の史的連続性やその意味変化の背景に注目していたが、その点を更に踏み込んで考察するには、危惧表現に与る語句にはどのようなものがあり、それらがどのような歴史的消長をしたのかといった危惧表現史の輪郭を明らかにする必要があることを感じるに至った。そのために、まず古語において「モゾ」「モコソ」以外にどのような語句が危惧表現に与っているかを明らかにし、本格的な危惧表現史研究の端緒とする。

3. 研究の方法

(1) 補助形容詞系難易表現については、容易の意を表す補助形容詞「～ヨシ/ヨイ」について、代表者自身のまとまった考察が行われ

ていないので、まずこれに関する通時的考察を試みる。

(2) 上記(1)によって、補助形容詞系難易表現に関して代表者による一通りの通時的考察が行われたことになるので、他の容易表現「～ヤスシ/ヤスイ」、困難表現「～ガタシ」「～ニクシ/ニクイ」「～ヅライ」等に関するこれまでの研究成果と合わせ、先行研究の成果も参看しつつ、補助形容詞系難易表現の史的变化の方向性や類型等に関する見通しを得ることをめざす。

(3) 可能表現については、補助動詞系の表現に関する代表者の従来の研究によって得られた知見を、吉井健らによる近年の研究の成果を取り入れつつ深めることをめざす。特に「～アヘズ」「～ヤラズ」については、従来個別に論を発表しており、その類似性にも注目してはいたものも、両者を対比した論を発表するには至っていないかった。その対比を容易にするため、まず両者が共通の動詞に下接する場合を主な考察対象とするという方針をとる。

(4) 危惧表現については、前述の2の(4)に対応して、古語において「モゾ」「モコソ」以外にそれに与っている表現をピックアップすることを目指す。その際、それと思われるものを思いつくままにピックアップするという方法では限界があると考えられるところから、「モゾ」「モコソ」によって危惧されている事態を表す語句をキーワードとし、その語句と共起する表現の中から危惧の意の表現に関与していると思われる表現を探すという手順をとる。

4. 研究成果

(1) 容易表現「～ヨシ/ヨイ」について通時的考察を試みた結果、次の①～⑤のような成果を得た。

①「～ヨシ/ヨイ」については、現代語について言われる、意志的動詞に下接し、主体側の“…することが容易でよしい”“むずかしさ、苦しさがなくて快感を覚える”というプラス評価の語(『基礎日本語』)という指摘が各時代においてほぼ当てはまり、その点あまり大きな時代的变化はないと言える。

②その中で中世の抄物における

「(狩の獲物は)小サイモノハイニクイゾ。
又射アツレバ死ヨイ」(毛詩抄 卷十)
の「死ヨイ」が無意志動詞に下接していると見られる点において、また
「君子ト云者ハ進ガタウテ退ヨイホドニ、

敬順デナクバ得事ハアルマイゾ」

(毛詩抄 卷六)

の「退ヨイ」がプラス評価を伴わない(マイナス評価が少なくとも中立的)と思われる点において、形容詞「ヨイ」からの意味の漂白化、文法化が進展している例かと考えられ、注目された。

③ 近世以降、上記②に相当する例を見出すことは困難で、現代共通語にも受け継がれていない用法と見られるが、代表者が以前指摘した下掲の「腐りよい」が、無意動詞に下接し、マイナスの評価を伴うという点において、特異な例として改めて注目された。この用例については、発言者の堀本宜実議員が愛媛県越智郡玉川村(現今治市)出身であるところから、地域的な特色のある用法ではないかとの見方を示した。

牛乳なんというものの製品は大へん腐り
よい足の早いものでございまして

(第36国会農林水産委員会第二号(1960年10月21日)会議録 発言者堀本宜実議員)

http://kokkai.ndl.go.jp/cgi-bin/KENSAKU/swk_dispdoc.cgi?SESSION=2156&SAVED_RID=2&PAGE=0&POS=0&TOTAL=0&SRV_ID=2&DOC_ID=10385&DPAGE=1&DTOTAL=1&DPOS=1&SORT_DIR=1&SORT_TYPE=0&MODE=1&DMY=2803

④ 「～ヤスシ/ヤスイ」との関係に着目した場合、「～ヤスシ/ヤスイ」は単独用法の持つ「安易・安直」といった意味が影響してか、マイナス評価的と見られるか、少なくとも全面的にプラス評価と見るのは躊躇されるといった例が多く、その点で「～ヨシ/ヨイ」との棲み分け分けが行われていたものと思われる。そのためか、「～ヤスシ」と「～ヨイ」に共通の動詞が上接する例を(とりわけ同一作品や同じ筆者の作品で)見出すのは難しいが、中世の抄物になると、共通の動詞に「～ヤスイ」と「～ヨイ」が下接する例が見られるようになり、これは上記②のような「～ヨイ」の新用法の出現に加えて、「～ヤスイ」の変化(プラス評価を伴う用法の増加等)も一因となっているとの見解を示した。ただし近世以降の両者の関係等について課題も残った。

⑤ 以上の①～④の点は後掲の「雑誌論文③」に反映されたが、同論文の発表後、上記③の点について、今治市中心部の生まれ育ちの人から、今治地方では「牛乳は腐りよい」「椅子がこわれよい」「ご飯がすえよいけん、夏は気つけいよ」等とよく使われる旨の情報を得た、とのご教示をいただいた(愛媛大学・佐藤栄作氏による)。また新居浜市出身者から「(人にもものをあげようとするとき、腐りやすいからやめておきなさいという意味で)

くさつりよいけん、やめとかんかい」のように言うとの情報を得たのご教示もいただいた(大阪大学・小矢野哲夫氏による)。

これらの情報から、このような「～ヨイ」は今治市やその近辺に分布するものであることの蓋然性が高まったと考えられるとともに、より詳細な分布状況の調査や、抄物の「死ヨイ」や「退ヨイ」とつながるものであるか否かの検証—技術的な困難は予想されるが—等の必要性が高まったと言える。

(2) 補助形容詞系難易表現の史的動向について、(1)の成果や代表者のこれ以前の研究成果、先行研究の成果も踏まえつつ考察を試み、次の①～⑤のような成果・見解を得た。

① 他の意味から難易の意味に転じたものの場合、感情・感覚的な意味(「ニクシ」「ツラシ」「ヤスシ」等)や、優劣・好悪の評価の意味(「ヨシ」等)から、難易の意へという方向性が大枠として認められるが、更に細分すると次の3種に分けられ、(C)に属するものは文法化・意味の漂白化の進展度において特に注目されるとの見解を得た。

(A) 単独用法の時点から、主に難易性の意味を持ち、動詞下接用法にもそれが受け継がれたと見られるもの。(「～ガタシ」)

(B) 単独用法において、「平穩・安心」といった感情・感覚的な意味と、「平易」という難易性の意味を持ち、動詞下接用法には後者が引き継がれたと見られるもの。(「～ヤスシ/ヤスイ」)

(C) 単独用法で感情・感覚的な意味や優劣・好悪の意味を表しており、動詞下接用法において難易の意に転じたと見られるもの。(「～ニクシ/ニクイ」「～ヅライ」「～ヨシ/ヨイ」)

② 上記①の分類で(C)に属するもののうち、困難表現「～ニクシ/ニクイ」は、現代語に至るまでに、意味の漂白化・文法化が進んでおり、「～ヅライ」もそれと同様のところまでの変化が進みつつあるように見えるのに対し、容易表現「～ヨシ/ヨイ」はそれがあまり進まず、前述4の(1)の②のように、一旦意味の漂白化・文法化がある程度進んだような兆候も見せながら、それが定着したり進展したりすることは(少なくとも共通語においては)なく、あたかも変化が逆行したかのようにさえ見える点において、困難表現とは相違が認められるとの整理を行った。

③ 困難表現は「～ガタシ」から「～ニクシ/ニクイ」、更に「～ヅライ」へと、入れ替わりが進んでいるのに対し、容易表現は入れ替わりが少なく、「～ヤスシ/ヤスイ」と「～ヨシ/ヨイ」の二本立てという点では、上代以来変化していないようにさえ見えるところか

ら、上記②の点と合わせると、容易表現は相対表現と比べては変化が大きく、また入れ替わり・更新も活発に行われているとの見通しを得た。

④ 困難表現の特徴として、

[非難・制止]

「あなききにくや。(中略)口にまかせてな
おとしめ給ひそ」(源氏物語 真木柱)

[断り]

「仰せはごもつともなれども、わが身にと
っては叶ひがたい(canaigatai)」

(エソポのハブラス)

[婉曲]

「何トヤラン聞ニクキ名ヲ立シカバ」

(延慶本平家物語 第六末)

[遠慮]

「申しにくひ御無心ながら」

(歌舞伎 東海道四谷怪談 序幕)

[斟酌]

「待ちにくくもござらうが今日一日の所を
待つて上げて下され」

(歌舞伎 三人吉三廓初買 四幕目)

といった多彩な用法が見られ、配慮表現との接点も少なからず見受けられると思われるのに対し、容易表現のほうはそのような用法の広がりか認め難いことを指摘し、先行研究でも述べられている困難表現の用例数の多さの一因となっているとともに、このような多彩な用法を持つことが新たな表現による更新の必要性にもつながり、困難表現の入れ替わり・更新の活発さにもつながっているとの見解を示した。

ただしこの見解を確かなものとするには、上記の各用法の出現の時期や定着の課程について更なる考察が必要と思われ、その点で課題も残る。

また、例えば「断り」に関しては、不可能表現が断りの述部に使われるとの指摘があり、「遠慮」に関しては「申しかねますが」のように「～カネル」にも同様の用法がある等、これらの用法における困難表現と不可能表現の接点も更なる課題となる。

⑤ 現在変化が進行中と見られる「～ヅライ」について「～ニクイ」との使い分けに関するアンケート調査を若者世代を対象に行い、2004年の調査結果と2011年のそれとの対比を行うことでその間の進展の有無等についても考察することで、難易表現の変化に関する考察の一助とした。ただし質問する文例の選択や、世代差・文体差・性差等についての課題も残った。

(以上は概ね後掲の「雑誌論文②」に反映)

(3) 可能表現については、補助動詞系表現「～アヘズ」「～ヤラズ」を中心に検討を行った

結果、次の①～⑥のような成果・見通しを得た。

① 「～アヘズ」「～ヤラズ」は動詞に由来すると考えられ、概ね否定辞・否定的反語を伴うという共通性がある一方、上接動詞に違いがあったり、それが時代的に変化したりするため、両者を全体的に対比することは必ずしも容易でない面がある。そこで3の(3)で述べたように、まず両者が共通の動詞に下接する場合についての対比を行うとの方針を立て、具体的には中古において「言ふ」「書く」等の発話・言語表現系の意味の動詞に下接する場合が比較・検討の対象として有効との見通しを得た。

② 「～ヤラズ」の場合、(a)発言等が全くできていないと見られる例、(b)途中で断念・中止したと見られる例、(c)途中で停滞等しながらも一通り述べるべきことを述べたと見られる例が認められる。一方「～アヘズ」の場合、(c)に相当すると見られる例が少なく、それかと思われる例は、「～するや否や」という[時間的近接]の意に近いものになるとの見解を得た。

③ 「多数対象に対する完全対応への非到達」の意に解される例が「～ヤラズ」「～アヘズ」とにもあるが、前者は、「言ひもやらず数をつくしたり」(栄花物語 卷三十)等、称賛のニュアンスがあるのに対し、後者は「えぞかぞへあへはべらぬや」(源氏物語 若菜上)等、数の多さを嘆いたり厄介なものを見たりすることが多いとの見解を得た。

④ 「～ヤラズ」には、「まねびやらむ方なし」(源氏物語 賢木)といった「表現水準への非到達」と解される例が認められるが、「～アヘズ」には蜻蛉日記にそれかと思われる例がある程度で、この用法は十分発達しなかったのではないかとの見解を得た。

⑤ 「困難・阻害要因」に注目した場合、「～ヤラズ」は話し手・書き手の心情・感情や性向といった内面的要因によることが多く、他者のとった阻害的行動が要因であることは少ない。また「～ヤラズ」の場合、「困難・阻害要因」は既定・織り込み済みのものであることが多いのに対し、「～アヘズ」の場合は新たに生じた事態であることが多い、といった見解を得た。

⑥ 以上の点、特に②～④の点を総合すると、「～アヘズ」「～ヤラズ」の間に違いも見られるものの、「自発形式」「完遂形式」に大別するとすれば、両者ともに「完遂形式」に分類される可能性が高いとの見通しを有するに

至った。一方、②～⑤の相違が何に基づくものであるのか(例えば本動詞としての意味の差に由来するものであるのか否か)、①で着目した動詞以外ではどうか、中世以後の「～アヘズ」「～ヤラズ」の意味展開にどうつながっていくのか、等の課題も残した。

(4) 危惧表現については、2の(4)に記した経緯から、古語において「モゾ」「モコソ」以外に危惧表現に与っている語をピックアップすることを旨とし、以下の①の方針・手順のもと、②③④のような成果・見通し・課題を得た。

① 古語では「モゾ」「モコソ」が危惧表現に与る語として知られているため、それを利用し、

(I) まず、確実に「危惧」の意と見られる「モゾ」「モコソ」の用例を取り上げ、そこで危惧されている事態(以下「被危惧事態」)を表す語句に注目する。例えば「罪もこそ得れ」(源氏物語 早蕨)であれば「罪-得」を被危惧事態を表す語句と見て注目する。

(II) 上記(I)をふまえて、例えば被危惧事態が「罪-得」であれば、「罪-得」の他の用例を調べて、その事態を危惧的に述べる場合にどのような表現が用いられているかをチェックする。例えば「罪得ぬべきわざにもあるかな」(源氏物語 夢浮橋)という例があれば、「ヌベシ」をピックアップする

② 上記①の方法を源氏物語において実行した結果、

(a) 上記の「ヌベシ」や「人のみとがめつべければ」(薄雲)のような「ツベシ」、「必ず罪得待なん」(夢浮橋)のような「ナム」等の複合助動詞系表現。

(b) 「罪もや得む」(総角)のような「モヤ(一ム)」、「見とがむる人やあらむ」(宿木)の「ヤーム」や「ヤーム」等の疑問推量系表現。

(c) 「人けしき見はべりなば、なかなかにとあしかりなん」(浮舟)のような「仮定条件表現プラス評価語」系の表現。

等が、「モゾ」「モコソ」以外の危惧表現の候補としてピックアップされた。

③ 上代には危惧の意を表す「モゾ」「モコソ」の用例が殆ど見られないため、上記①の方法がそのままでは適用できない。そのため、例えば上代の万葉集を対象とする場合、「非危惧事態」を抽出する資料を時代・文体的に接近する中古中期頃までの和歌集に広げることといった方法を考え、その結果②の場合とほぼ同様の表現がピックアップされたが、他の方法との併用の必要性等、なお課題が残った。

この他にも、同じく「モゾ」「モコソ」の用例自体が殆ど見られない訓点資料の扱い

や、上記の方法では「モゾ」「モコソ」と質的に近い危惧表現しかピックアップされないのではないかと、といった課題も残ることとなった。

(以上①～③は概ね「学界発表①」に基づき、①②は「雑誌論文①」にも反映)

④ 今後の課題としては、上記③で述べたことに加え、中世以後も含めた各時代の危惧表現の更なるピックアップ、それらピックアップされた危惧表現の各論的検討、危惧表現と可能表現・可能性表現との連続性・近接性についての実証的・理論的な面からの論証等が挙げられるが、それらの課題は新規の科学研究費補助金(研究代表者近藤明 基盤研究 C 25370513 平成25年度～平成27年度)に受け継がれることとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

① 近藤 明「中古における危惧表現をめぐって—『モゾ』『モコソ』とその周辺」(国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 32』) 査読有 2013,45-57

② 近藤 明「形容詞系難易表現の史的変遷をめぐって」(『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』5) 査読無 2013,11-21

③ 近藤 明「容易の意の『～ヨシ/ヨイ』の語史」(『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』4) 査読無 2012, 1-10

〔学会発表〕(計1件)

① 近藤 明「古語における危惧表現をめぐって—『モゾ』『モコソ』とその周辺—」 北陸古典研究会 2011年度下半期研究発表会 2012年3月31日 金沢大学サテライトプラザ(石川県金沢市)

〔その他〕

ホームページ等

雑誌論文②③は、金沢大学学術情報リポジトリ KURA に登録・公開。

雑誌論文②

<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/handle/2297/34399>

雑誌論文③

<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/handle/2297/30399>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 明 (KONDOH AKIRA)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：50178406